

ぼんぼんちやうか

桑原 正紀

テレビの国会中継をたまに観る。先日 of 参議院予算委員会でのこと。立憲民主党の辻元清美委員が菅総理に、自民党の世襲議員が約四割もいることを指摘し、全員がダメ議員というわけではないが、中には「えらいこの人ぼんぼんちやうか、という人もいてるんですよ」と言っているのを聞いて思わず笑った。辻元さんは時々このように大阪弁を実にうまく使う。緊迫した議場の雰囲気を一瞬なごませ、直後にまた舌鋒鋭く突っ込みを入れるのだ。

この大阪弁の持つている独特のニュアンスを、短歌でうまく使う第一人者は池田はるみであろう。

あんたホホしようにむないことしよ
うかいな格子は春の銀色しづく
『妣が国・大阪』

むかしあし犬のアチャコはむちやくちやでござりまするといへば走りき
同

死ぬ母に死んだらあかんと言はなんだ氷雨が降ればしんしん思ふ
『ガーゼ』

だれでもいい来てほしいなら今日ひまなばあばがいこか、歩いていこか
『亀さんゐない』

各歌集に散見する程度だが強く印象に残っている。この大阪弁のほわっとした柔らかさは、標準語はもとより、この方言にもない味わいがある。いかにも商人の町大阪の風土が生み出した、長い歴史を負った言葉という感じがする。さらに大阪は大衆娯楽の歴史も古く、とりわけ落語・漫才・大衆喜劇は独特の発達を遂げ、いまだに〈お笑い〉の世界は関西圏の方が圧倒的なシェアを誇っている。

池田さんの歌は〈お笑い短歌〉ではないが、泣き笑いの人情劇のような、庶民性に根づいた世界を思わせる。

方言の効能についてはいつか書いたが、やはり実際の日常語としての方言をうまく使うと、作品にいい味の出ることが多い。「コスモス」十一月号から。

「面会に来てくれへんと忘れるえ、あんたらの顔」と
母は元気だ
前田 令子（京都）

もう一首、「短歌」十一月号から。

冷蔵庫にあるのに玉子また買った仕方ないのう年寄やけん
高野 公彦

高野さんの歌には「四国出身の年寄の独り言」と詞書きが付いている。前田さんの歌も高野さんの歌も、標準語に置き換えるとまったく別の趣きになる。方言が人間味のもった言葉として嵌まり込んでいるからだ。